

ユキちゃんと、ユウキと、
オナベと、キスト

いちは

まさかのまさか、だった。
彼女は、僕にこう言った。

「ごめん、男、好きじゃないんだ。そういうの、オナベって言うらしい」

お互いに二十歳。
僕は、恋はひたすら想えば叶うものだと思っていたけれど、
彼女は僕なんかより断然クールで、それが女の子だからなのか、
それともオナベという立ち位置によるものなのか、それは分からない。
とにかく、彼女は、クールだった。

彼女の名前は、ユキコ。
大学に入ってからずっと、僕は彼女をユキちゃんと呼んでいた。
身長は、低めのヒールをはけば男子と並ぶほど高い。
ショートカットで、色白で、長いまつげと切れ長の目。
女の子にしてはちょっと低めの声。
いつも白いシャツにジーンズをはいていた。
大学に入ってから同じ学部で知り合って、ユキちゃんとはかなり仲良かったと思う。
二人で飲みに行って酔いつぶれて、お互いの部屋に寝泊まりしたり、
授業を一緒にサボってカラオケやゲーセンに行ったり、
これはもう、僕から「付き合って」と言いさえすれば交際開始なんだと、
そう思っていたからこそ告白したのだ。

それが、まさかまさかの、こんなフラれ方。

ユキちゃんは、その日から、ユウキになった。
心の中でのイメージとしては「ユーキ」。
ユキちゃんを、もっと馴れ馴れしく呼んでいるような、そんなニュアンスで。
別にそう呼んでと頼まれたわけではないけれど、
僕の気持ちの整理をつける目的が半分、いや、七割で、
ユキちゃんになんとか気がついたのが三割。
オナベにちゃん付けが正しいのか分からなかったし、君付けは変だと思ったから。

ユウキと呼び出してから、僕たちはさらに仲良くなった、ような気がする。
遊びに行く回数も増えたし、お互いに軽口を叩きあう頻度も増えた。
正直なところ、僕には、微かな恋心が残っていた。
ユウキはというと……、きっと気が楽になったのかな。
そんな関係で、俺たちは学生生活を送った。

ユウキから、好きな人ができたと言われたのは、二年生の後期。
十一月を過ぎていた。

僕はユウキに連れられて、相手の学部の授業に忍び込んだ。
授業が始まる直前。
ユウキが顔を少しだけ赤くして、前の方の席を指さした。
一番前の席、そこに座っていたのは。

違う学部の。

女の子。

当たり前だけど。

いや、当たり前なんかじゃない。
当たり前なはずはないんだけど、うん、納得した。

そして。
ショックだった。
これまた、当たり前だけど。

それから。
ショックと同時に、相手が女の子でホッとしたのも偽らざる気持ち。
男心、意外に複雑。

そんな心境だったけれど、そこはもう、男と男の友情くらいの勢いで、

「良かったじゃん、可愛いじゃん」

そう言うしかなかった。
実際のところ、小さくて女の子ぽいだけで、顔はそれほど可愛くもなかったけれど。

その日から、だと思う。
ユウキとは何となく疎遠になった。
僕は淡い恋心をユウキに抱いていたけれど、ユウキは小さな女の子が好き。
その事実を突き付けられたから、なのかもしれない。
ユウキがオナベだっていうことを、実感したからかもしれない。
よく、わからない。

そうこうするうちに、僕にも彼女ができた。
彼女の名はサキちゃん。
ユウキと違って小さくて、ユウキと違って目がパッチリしていて、
ユウキと違って、いつもスカートをはいていて。
それから、ユウキと違って、声も高くて、ものすごく女の子ぽかった。
僕は本気でサキちゃんを好きになったし、サキちゃんからも好かれていた、と思う。
だけど、恋愛って、一寸先は闇。
「好きだけど、キョリをおきたいの」
そのあけたキョリに、別の男が入ってくるなんて、思いもしなかった。
僕のサキちゃんは、一夜にして、誰かのサキちゃんになってしまった。
女心は、やっぱり複雑だ。

僕は傷心でしばらく大学を休んだ。
一人暮らしの部屋でボーっとして過ごして、ゆっくり、ゆっくりと、僕は立ち直った。
元気になると、誰かと話したくなかったけれど、
かといって男友だちと話すのは、なんとなく嫌だった。
からかわれるのはごめんだし、同情されるのは最悪だ。
失恋をネタにされたら、そいつをぶん殴るかもしれないし。
だから僕は、久しぶりに話す相手をユウキに決めて、ユウキの携帯に電話をかけた。
「もしもし」
久しぶりのユウキの声。
「久しぶりに、飲みますか」
軽さを装ってそう言うと、ユウキは、
「オッケ。今家だから。いろいろ買ってきて」
と、これまた軽そうに答えた。

久しぶりに会ったユウキは、前より少し髪が伸びていて、
大して整えたりしていないんだけど、それがまた似合っていた。
僕たちは、缶ビールで乾杯をした。
アルミ缶のクニャンとした音が鳴った。
それから、買ってきたお菓子やおつまみを食べて、
チューハイを飲んで、日本酒も少し飲んだところで、
僕はもう、良い感じで酔っぱらっていた。

他愛もない話をしている時、何気ないふりをして、

「彼女がいたんだけどさ、結局、ふられたよ～」

そう言った。

何気ない風にしたはずが、ため息と声を混ぜたような口調になった。

ユウキは、しばらくだまって、ふうと長いため息をついた。

ユウキも、かなり酔っているのかもしれない。

「キスしようか」

そう言ったユウキの目は、切れ長というより、細かった。

色白の頬が、赤かった。

声は多分、いつにもまして低かった。

そんなユウキを見つめる僕も、酔っていた。

心臓は大太鼓を打っていたけれど、なぜか気持ちは冷静だった。

ドクンドクンと心臓が動くたびに、アルコールが脳に運び込まれて、脳細胞の一つ一つがにぶくなっていく。

そうして、脳全体にアルコールが行きわたったように感じて、頭の芯、もしかしたら、それは心の真ん中なのかもしれないけれど、その部分だけはキンキンに冷えて、ギラギラと冴えていた。

ユウキはぎゅっと目を閉じて、僕はまぶたを開けたまま。

くちびるが重なった。

僕は、ユウキの肩を抱いた。

ユウキは、両手を床につけたまま。

僕は、ユウキの背中に手をまわして、強く抱きしめた。

ユウキの体が硬くなったのが分かった。

僕は、自分のくちびるを開いた。

ユウキのくちびるは、瞳と同じで、かたく閉じたままだった。

ゆっくりと、ユウキの右手が僕の胸に当てられて、

それから僕は、ユウキから引き離された。

ユウキと目が合った瞬間、ユウキが何か言った。

「ゴ……」しか聞こえなかったけれど、ユウキが言いたかった言葉は分かる。

なぜなら僕も、そのあとに「ゴ……」としか声が出なかったから。

僕は下を向いて、目の端でユウキを見ていた。

ユウキも、うつむいていた。

数分、もしかしたら数十秒かもしれない。

ちょっとした沈黙の後、ユウキが顔を上げるのが分かった。

それに合わせて、僕もユウキを見た。

また、目が合った。

何か言わなきゃ。

そう思った僕が口を開きかけた時。

「オエツ」

ユウキはそう言って、顔をしかめて、それから少しはにかんだ。
僕は、ユウキのその顔を見て、立ち上がった。
そして、洗面所まで行って、わざと大きな音でうがいした。
遠くの方で、ユウキの、

「ひどっ」

と言う声、それから笑い声が聞こえてきた。

しばらくお互いに笑いあって、ユウキがポツンと言った。

「同性とキスするのって、やっぱり抵抗あるし、キモチわるい、ね」

僕には何となく、ユウキはユウキで、辛いことがあったのかもしれないと思った。

僕は、心も体も、完全に男。
ユウキは、本当は女の子のユキちゃん、
だけどオナベで、
だから、オナベのユウキ。

ユキちゃんと付き合いだった僕は、ユウキとキスをした。

恋心は、消えた。

ユキちゃん、さようなら。

友情は、残った。

ユウキ、今後とも、よろしく。